

幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を



松 隈 玲 子

保育者と子どもとのかわりあいの中で「心のゆとり」についての考察をすすめるうちに、「心のゆとり」をもつと云うことは「心のたたかい」をもつという意味が含まれ、葛藤の経験を通して自分の意志を育てることの意義が明らかになった。

心のたたかいを経験した上で自からかちとった目標達成のよるこびは、あらかじめ仕組まれたルートの上に乗せられての目標達成のよるこびに倍加するものであり、このよるこびによってもたらされた自信は、後の退行現象への歯どめとなる。

このように目標達成のためにはまわり道をおそれず、困難や障害があってもそれを乗りこえていくことのできる心のゆとりを育てることは幼児期の人間形成の上で最も望まれることであろう。

しかるに現代社会の現状は、子どもの欲求と目標達成の間がきわめて短絡的な場合が多く、子どもたちは僅かな障害に出会ってもすぐに目標達成をあきらめたり、容易に達成できそうにない目標は、はじめから敬遠してしまう傾向がある。これは目に見える

進歩や成果のないものは無駄な骨折りだと考える風潮や、子どもの心を過度に尊重し、できるだけ欲求不満を経験させまいと願う親心と相まって、子どもから、待つ、耐える、努力するという気構えを失なわせ、目標達成までの道のりは遠くてもがんばり通そうとする意欲を奪い去った。その結果、反応は速いが根気がない。スタンドブレイには強いが地道な努力を嫌うといういわゆる現代っ子の特徴をつくりあげた。

望ましい幼児教育を考える立場から、このような現状を見る時、幼児教育においてこそ「目標のゆとり」を大切に思い、「目標達成への見通しを適切に見きわめることのできる保育者の目」のたしかさが必要であると考える。

以上により本稿では「目標のゆとり」と「目標への見通し」の二つの面から保育の場における事例をとりあげ、考察をすすめたい。

○ 目標にかかわるゆとり

目標のゆとりのその一は、狭い範囲内からだけ見て、目標を決めてしまわない事である。

事例 五歳児クラスで三個のくまの人形を用いた人形あそびを行なった。活動のねらいは「人形に命名すること」「人形の役割をきめて役割に適切なことばづけをすること」である。

担当教師はいわゆるベテランであり、保育の流れは活発にスムーズにはこばれたが、この時の観察で次のようなことに気付かされた。

設定時間内に教師の発問によく応答し、活動のねらいを達成していると思われた子どもの七六%が、日常保育活動において、「発話に積極性がある」とされた子どもたちであり、設定保育終了後、保育室に置かれた人形に引続いて興味と関心をもち、人形あそびを継続した子どもたちの七三%が日常保育活動において「発話が消極的である」とみなされている子どもたちであったことである。

ことに設定保育中は一言も発言しなかったK子が、教師が保育室を出るとすぐに人形を抱いて「さあこのくまさんは何というお名前にしましょうか」「くまのゴン太君は、蜂蜜が大好きだつてよ」と日頃仲良しのS子、Y子に話しかけ、リーダーシップをとっての人形あそびの再現をはじめたことは、設定保育時間内には

保育活動のねらいが達成できなかったと教師に把握されたであろう子どもたちの中に、教師のいない所で活動を理解し、目標を達成している子どもがいることに気付かされた。このことから、保育者は目標設定に際して、年齢を基準とした普遍的なものを考慮すると共に、個性に由来する現象面のちがいをよく理解し、把握した上での保育のあり方が必要であると考えられる。と同時に、保育者は、目に見え、耳に聞こえる範囲内における子どもとの対応のみをよりどころとして子どもを判断したり評価したりするのはなく、もっと広い範囲での保育者と子どもとの関係を考える保育をめざすことが望まれる。

目標のゆとり、その二は目標達成をあせらないことである。

事例 四歳児のYは牛乳嫌い、小学校の給食にも出るし、栄養価も高いので是非牛乳を飲める子にしたいと考えた両親は、Yの入園前、あれこれと毎日のように試みたが失敗に終わった。

入園後、牛乳は嫌いだが、乳製品は食べるといふYに保育者は、牛乳の大切さを保育活動の中でお話や人形劇を用いてうけとめさせる以外は、直接的な働きかけは全くなかった。そして、入園後三ヵ月すぎて、友だちの仲間意識が芽生えはじめた時、はじめたYの牛乳びんに温度計のような目盛をかき、三ミリでも五ミリでも飲めた時は、「強い心」になったとはめることにした。

家庭での試みとちがって飲めないことを叱られるのではなく、飲めたことをうんとほめられるようになってからYは、牛乳が配られても嫌な顔をしなくなった。まわりの子どもたちもYの牛乳が少しでも減った日は自分のことのようによこび、「がんばれ、がんばれ」と声援するようになった。縦割りクラスのため、年長児から「今日はY君すごいこんなに飲んだ」と云われるのがうれしく、牛乳を飲む量が目に見えてふえはじめ、入園後四ヵ月、直接指導をはじめてから一ヵ月たらずで牛乳を飲むことを苦にしない子になった。

この事例から、Yの家庭同様、我々もともすれば最終目標や理想像に一挙に子どもを近づけようとあせることよってかえって子どもの自発性を失わせていることに気付かされる。子どもの現状をよく理解し、その子の自発性の回復を待ちながら、到達できる目標を選び、それを根気よくつみ重ねていくこと、保育者と子どもとの二者関係でなく、まわりの子どもとのかかわりあいの中での指導がなされることが望まれる。

事例 ある幼稚園での七夕ゆうぎ会の時である。五歳児のリトミックが終了した時、案内して下さった先生がほっとした表情で云われた。「やっと七夕も終わった。夏休みがすむと運動会、あの一番前の男の子、今日をはじめてまぢがえずに出来たのですよ。何

でも一テンが遅くて、また運動会前は特訓で大変だわ。小学校へ入学するまでに人並みになれるか知ら」この先生のことばは、多くの保育者の心のどこかに去来する、年齢的段階をふまえての目標到達へのあせりをよく表わしている。

一度もまぢがえずにできたことが、例え他の子どももよりはるかに遅れた時であっても、その子にとっては最良の時であり、大切な成長の節であったにもかかわらず、誰からもほめてもらえず、できたのは当り前で、保育者の心はもう次の目標へその子を到達させることで一杯である。この事例からも保育者は、年齢的な発達段階にのみ焦点をあてた保育目標に終始するのではなく、個人的発達段階、成長の節をその時々立ち止まってよくみきわめ、大切に思う目標のゆとりをもつことが望まれる。

。目標への見直し

目標への見直しのその一は、プロセスに対する確かな理解と判断をもつことである。

事例 M君がかまきりのたまごのついた枯枝を持ってきた。保育者は子どもたちにその卵を見せて、「春になったらかまきりの赤ちゃんが産まれます」と話した。「早く春になるといいな」と大よろこびの子どもたちをみて保育者は、実物を見せたり、さわ

らせたりして良い保育ができたと思った。ところが保育室に置かれたかまきりの卵は間もなく保育者からも子どもからも忘れられ、保育室には暖房がはいった。暖かい室内で、三月のはじめ、卵は孵化しはじめ、数えきれないほどの小さなかまきりが棚をつたい、ピアノの上を動きまわった。

「ばんざい、先生みんなで育てようね」「かまきりの餌は何なの？」「餌を探しに行こう」子どもたちのよろこびとは裏腹に保育者は困惑した。二か月も早く孵化したかまきりの餌になる虫がないからである。保育者は考えた。そして「かまきりの赤ちゃんは自分で餌を探すのよ。生れたばかりなのにえらいわね。さあみんなで草原につれていってあげましょう」かまきりは園の裏にある草原に放たれた。保育者はこのあと「先生もうかまきりの赤ちゃん餌がみつかったかねえ」「今頃いただきますって食べてる？」「もうすぐあそこの草の所かまきりだらけになるよねえ」と子どもたちに云われるたびに餓死したであろうかまきりを思っ

て心が痛んだという。

この保育者の心の痛みは、日々の保育において、自分の見通しのなさと、的確な判断をおこたったことがもたらした失敗を、子どもの前だけは何とかつじつまをあわせたつもりでの保育活動経験をもつものにとっては共感をよぶ痛みである。この事例を通し

て、保育者は目標到達へのプロセスに対する確かな理解と判断とを、常に忘れてはならないことに気付かされる。

目標への見通し、その二は、長い時間をへだてての目標の達成を待つことである。

事例 Jの運動能力の劣ることは幼稚園時代有名であった。すべり台をおさるおさるすべり、ブランコの立ちこぎはできず、ジャングルジムの脚を一本ずつゆすってみて、動かないことを見きわめてからやっと三段目までのぼるJは、運動会前になると「J君がいるからぼくは絶対ビリにはならないよ」とかけっこにできる他の子どもの変な保証の対象となった。

担任のH先生はそんなJをはげましながら、一緒にジャングルジムにのぼり、ブランコをこいだ。けれどもJの運動能力は、二年の在園中殆んど進歩のあととはみられなかった。

けれども先生はあせらなかつた。Jの運動能力の劣るのは、本来的なものに加えて意志の欠如によるものであると推察し、意志の育つことを根気よく待った。以下卒園の時のJの連絡ノートの一節である。(原文はひらがなである)

「J君、いよいよ卒園ですね。小学校へいったら大好きなお話や虫の勉強をたくさんして下さい。それから苦手といっていた図工だって体育だって一生懸命がんばろうと思ったらきつとできる

よ。先生と一緒だったら、土手にものぼったね。ブランコの立ちこぎだつて出来たね。先生はJ君が小学生になつてもずっとJ君のことを思つて応援しています。鉄棒の前まわりができたら、とび箱五段とべたら先生に教えてね。毎日たのしみに待っています。J君へ H・Y子より」

小学校へ入学したJは低学年の間は、体育は最も苦手、評価も2と3の間をいったりきたりの状態であつた。しかしH先生の幼稚園時代の思い出と連絡ノートは、J親子の心の支えとなり、「いつかは出来るようになる」という希望を失なわなかつた。ところが四年生になつた時、他教科の面での活躍が認められて、学校や町内子ども会の役員に選ばれるようになると「苦手な体育でも、あまりみっともないところを下級生に見られたくない、なんとかうまくやりたい」という気持が芽生えた。はじめて「努力しよう」という積極的意志が生まれたのである。丁度この時、五年生になり担任はK先生という学卒の若い情熱にもえた先生となつた。Jは兄のような先生に親近感を抱き、担任も又、Jの悩みに共感して二人三脚のような特訓がはじまつた。

早朝のランニング、腕たてふせ、水泳、放課後のキャッチボールなどJは特訓によく堪え、遅々とした歩みながら運動能力は着実に実を結びはじめた。六年の春、生まれてはじめて校内のクラ

ス対抗リレー大会に選手として出場することになつたJは、闘志をもやして、一位の走者を追い抜きクラスに逆転優勝をもたらした。先生やクラスの友だちと跳び上つてよろこんだJはこれを契機として、何事でもやってみようとする積極的態度が備わり、運動や体育的な遊びを通して、これまでになかつた交友関係の幅が広がるなど、人間的な成長がみられるようになった。

保育者は卒園までをその子の目標達成の期間ときめてしまいがちであるが、個人にかかわる目標は卒園後へもちこされることも必要なのである。Jの場合も、本来的な運動能力と、意志の統御が可能になつて後に修得される運動能力とが考えられ、幼稚園時代には年齢的な運動能力が特に進んでいない場合、それをこえて働く意志の統御を求めることはむずかしい。

しかし年齢がすすみ、意志の自己統御が可能な年齢になつてみると、意欲的に練習にとりくむことが可能となり、運動能力が啓発される。即ち本来的に不得手なように見えた運動にかかわる技術や能力が、意欲的な習練によって著しい進境をみせる。

以上の事例から理解されるように、ゆとりは、心情的なあり方と同時に、身体的な実態と重なりあう中で保たれていなければならぬということが云えるであらう。

(つづく)

(西南女学院短期大学)